

坂田

年刊
Tabaruzaka
Vol.7

特集 熊本籠城戦 その2

— 萬死ヲ期シ熊本城ヲ保タザルハカラズ —

僧五岳「唯有此城遮賊氛」

ともに戦った
医師・経理官

最大の激戦「段山の戦い」を読み解く

新しく生まれよる。
NEO ONE
KUMAMOTO



参軍 山縣有朋



熊本鎮台司令長官
谷 干城



熊本鎮台参謀長
樺山資紀



熊本鎮台参謀
児玉源太郎



熊本籠城戦特集 その2

― 萬死ヲ期シ熊本城ヲ保タザルベカラズ ―

西南戦争。攻守の肝は熊本城（熊本鎮台）であった。

名城の誉れ高い熊本城が落ちれば、各地の不平士族が西郷に同調・蜂起し、戦乱が全国に飛び火する可能性があったからである。

杞憂ではない。実際に熊本をはじめ九州各地の士族が党薩諸隊として参戦。高知・山形でも蜂起の動きがあり、板垣退助・菅 実秀がこれを制止した経緯がある。

熊本城堅守―それは政府軍にとって戦いの主題であったといえる。

熊本鎮台司令長官 谷 干城

「熊本ノ存亡ハ天下人心ノ繫ル所」

参軍 山縣有朋

「唯萬死ヲ期シ熊本城ヲ保タザルベカラズ」

指揮官たちはその意義を明確に捉えていた。

西南戦争といえば「田原坂の戦い」のイメージが強い。しかし、これも包囲された熊本城救援のために南下する政府軍旅団とこれを阻止せんとする薩摩軍との攻防であったのだ。

西南戦争の肝―薩摩軍の猛攻に耐え、政府軍勝利を導いた熊本城。熊本地震からの復旧が進む今、再び籠城戦を特集する。

【表紙】荻迫柿の木台場の戦闘

田原坂陥落。これにより薩摩軍は前線を後退し、植木、木留に防衛ラインを築いた。

植木口警視隊三等巡查窪田征巳郎（本資料館キャラクター）。四月六日、彼の属する一番小隊は柿ノ木台場を強襲、これを奪取するも、薩摩軍の反撃は凄まじかった。征四郎、負傷した仲間を抱えながらも奮戦する。

（画 榎木成香）

籠城戦の選択と必然

二月一四日、谷司令長官は將兵に籠城を指示する。

前年の神風連の変のショックから「兵卒ノ気魄」が復さない、「賊徒（薩摩兵）素ヨリ強兵」である、県下の士族に「賊ニ声息ヲ通スル者」が少なくない……などから、野戦を不利とし、熊本城の防御力に拠ることとしたのである。佐賀の乱（明治七年）における佐賀城からの出撃戦が失敗したことへの反省もあったと考えられる。

ただし、この戦略は、前提として薩摩軍が熊本城（熊本鎮台）を攻めなければ成立しない。

二月一九日、鹿児島県庁の使者がもたらした通知―薩摩軍が城下を通過する際に「兵隊整列」し、西郷の「指揮被受可」に対し、樺山参謀長は「兵器ヲ携ヘ国憲ヲ犯」す者は、たとえ西郷であっても「兵力ヲ以テ鎮圧スヘキ」と回答する。

二月二一日、川尻に到着した薩摩軍先鋒への偵察と陣所の放火を目論み、二箇中队（約三〇〇名）を派兵。結果、失敗に終わるが、兵員数が多いことから威力偵察であったとみられる。

これらによって、薩摩軍は鎮台の明確な戦意を、また、鹿児島出身で西郷とも懇意であった樺山の回答から内通者も期待できないことを悟る。熊本城攻撃を決し、かくして五二日間の籠城戦へ突入するのである。

籠城中の主な出撃戦

籠城軍は固く閉籠もっていたわけではない。戦況に応じて出撃して戦果を挙げ、兵糧も調達している。

注目したいのは京町口の出撃戦。田原坂陥落の報を受け、第一旅団との南北挟撃を試みた積極的な作戦であった。

突圍戦は、兵糧の枯渇が深刻となり決死隊（突圍隊・侵襲隊）を組織して臨んだ戦いであった。結果、九品寺で食料・小銃・弾薬を確保し、宇土まで進軍した衝背軍本営に連絡を果たした。



▲『参考鹿兒嶋新誌 第四輯』（明治11年）

兵糧不足も何のその

兵糧不足は籠城中、最も深刻な課題で、食べられるものは何でも食べた。当初は城中に多くいた犬も、次第に見えなくなつたという。谷干城書幅「丁丑熊城偶成」では「犬を屠りて犬尽き又馬を煮る不屈三千一致の兵」と食糧難とそれに負けない気概を詠っている。

日付	戦闘名	籠城軍		薩摩軍
		兵数	死者/負傷者数	死者数
2月22日	熊本城総攻撃	約 3,300	29/94	28
2月23日			7/24	21
2月27日	千草小学校の偵察戦	約 250	11/34	21
3月12・13日	段山の戦い	約 650	61/160	73以上
3月27日	京町口の出撃戦	約 700	37/106	18
4月8日	突圍戦	約 1,000	29/72	40

* 籠城軍兵数は1箇中隊（4箇小隊）約160名として算出。
薩摩軍の兵数は不詳。総攻撃では最大9千～1万名と推定される。

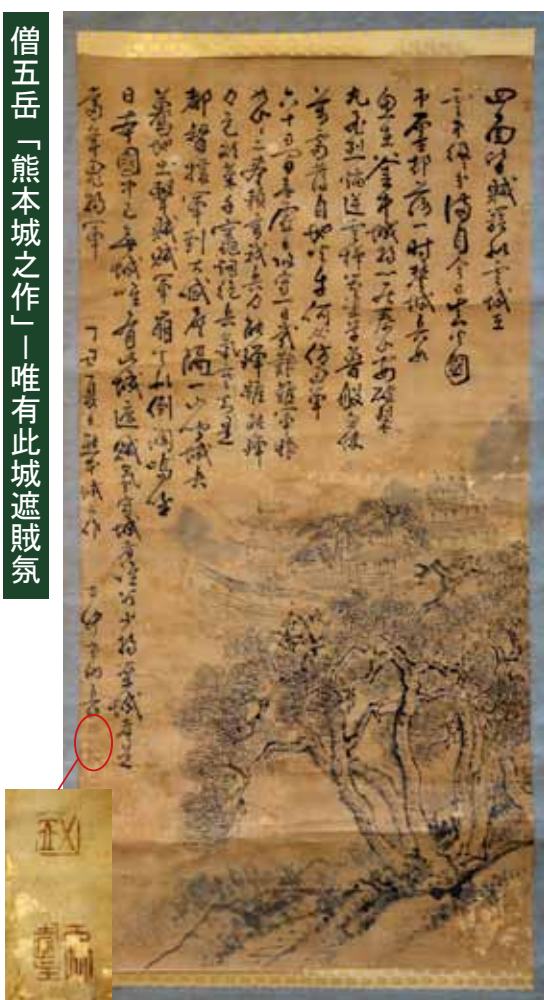


▲谷干城書幅

「城下は戦火に襲われ、まさに火の国となるなか、日本国中、ただこの城だけがあつて薩摩軍の勢いを遮った（唯有此城遮賊氛）。この城を築いた者、それはかつての鬼將軍加藤清正である」と、籠城戦の勝利と熊本城の堅固を称えている。この詩は「丁丑夏旦」、西南戦争中に詠んだもので、高橋公園の谷干城銅像の台座にも籠城の「情景八僧五岳ノ詩二躍如タリ」としてこの詩が刻まれている。

* 僧五岳（平野五岳）一八〇九～一八九三年
現在の太分県日田市の人。学問を広瀬淡窓に、絵画を田能村竹田に学び、詩・書・画に秀で「三絶」と評された。西郷とも交友があり、明治九年（一八七六）十一月、鹿兒島で西郷と面談し、この時、挙兵を思いとどまるよう説得したといわれる。

僧五岳「熊本城之作」ー唯有此城遮賊氛



▲「熊本城之作」と僧五岳の落款

籠城指揮官たちのその後

西南戦争後、要職に昇進・転身した者を紹介する。

大迫尚敏・奥保鞆・小川又次等、籠城戦で重要な局面を担った佐尉官たちが日清・日露戦争では将官として陸軍を統括している点に注目したい。

氏名	西南戦争		西南戦争後（Mは明治） *日清戦争 M27・28、日露戦争 M37・38
	籠城戦中	戦功（～M12）	
谷 干城	司令長官（少将）	中将	農商務大臣（M18）、貴族院議員（M23）
樺山資紀	参謀長（中佐）	歩兵大佐	海軍大将（M28）、内務大臣（M29）、文部大臣（M31）
児玉源太郎	参謀（少佐）	歩兵中佐	陸軍大臣（M33）、内務・文部大臣（M36） 陸軍大将（M37）
大迫尚敏	参謀（大尉→少佐） *千草小学校出撃戦指揮、突圍隊参謀		陸軍大将（M39）
川上操六	歩兵 13 連隊長（與倉の後任、少佐）	歩兵中佐	陸軍大将（M31）
奥 保鞆	歩兵第 13 連隊第 1 大隊長（少佐） *突圍隊指揮	歩兵中佐	陸軍大将（M36）、元帥（M44）
福原豊功	同上（奥の後任、大尉→少佐） *下馬橋（正面前線）守備		陸軍少将（M27）
林 隼之助	歩兵第 13 連隊第 2 大隊長（少佐）		陸軍大佐（M22）
小川又次	歩兵第 13 連隊第 3 大隊長心得（大尉） *侵襲隊指揮	歩兵少佐	陸軍大将（M38）
別役成義	工兵第六方面第 1 團区長（少佐） *熊本城を近代戦用に改造	工兵中佐	陸軍少将（M23）
塩屋方園	砲兵第 6 大隊長心得（大尉）	砲兵少佐	陸軍中将（M32）
中村宗則	会計部司契副（大尉相当） *兵糧調達担当	二等司契（少佐相当）	会計部監督長（少将相当）（M28）
綿貫吉直	警視隊総指揮長（少警視）	警視副総監	元老院議員（M19）



▲日露戦争記念碑
佐賀県白石町八坂神社に建つ。
揮毫「元帥陸軍大将 奥 保鞆」。

兵糧調達の功―中村宗則司契の栄達

中村宗則。熊本鎮台附会計部司契副。籠城における最大の課題ともいえる兵糧の調達を担った。この功により籠城戦直後の四月、二等司契（少佐相当）に昇進、七月には征討軍会計部次長・百貫石運輸局長に任じられて政府軍全体の兵站に関わっていく。

西南戦争後は勲四等旭日小綬章を授与され、その後も昇進を繰り返して、日清戦争時の明治二八年（一八九五）、ついには会計部の最高位である監督長（少将相当）に昇りつめる。籠城戦での活躍が栄達の契機となった。

*百貫石は当時、熊本の都市外港として栄えた有明海沿岸の港。西南戦争では兵站の拠点となった。

陸軍會計司契副中村宗則
任陸軍會計二等司契
明治十年四月廿五日
征討總督本營

陸軍會計司契副中村宗則
熊本鎮台附更被仰付候事
明治九年八月十日
陸軍省

- ▲右上 熊本鎮台附司契副の業務辞令
明治 9 年 8 月 12 日、陸軍省
- ▼左上 二等司契への昇任辞令
明治 10 年 4 月 25 日、征討總督本營
- ◀左下 征討軍会計次長・百貫石運輸局長の業務辞令
明治 10 年 7 月 28 日、征討總督本營

陸軍會計司契副中村宗則
征討軍團會計部次長共百貫石運輸局長
魚動被仰付候事
明治十年七月廿八日
征討總督本營

睦仁

▲左アップ
明治天皇ご親筆

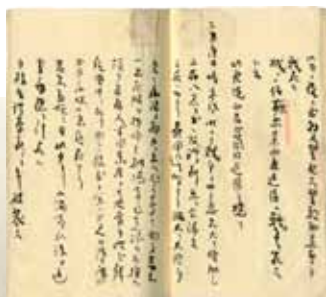


◀勲記
勲四等旭日小綬章

▶木原軍医籠城日誌



▲戦争直後の古写真、鎮台病院の一部（赤丸は弾痕）



「患者は二〇八名に増え、そのため分散して収容した。午後一時から病院内に激しい砲撃があり、小使一名が即死、患者一名が負傷した。看病人も大腿骨を負傷し、弾片を取り除いた。夕方砲撃があり、夜は当直で病院内を巡回した。」

最大の激戦「段山の戦い」の翌日、三月一四日の概要を紹介する。

「患者は二〇八名に増え、そのため分散して収容した。午後一時から病院内に激しい砲撃があり、小使一名が即死、患者一名が負傷した。看病人も大腿骨を負傷し、弾片を取り除いた。夕方砲撃があり、夜は当直で病院内を巡回した。」

医師も戦った

—木原義實軍医の籠城日誌



▲副島軍医宛ての治療報告

樺山参謀長負傷

—木原軍医の治療報告

熊本城総攻撃初日の二月二二日、藤崎宮の攻防で腹部に銃創を負った樺山の治療にあたった木原義實軍医が上司の副島軍医に対して、状況を報告した書状である。

「ひとまず脈は良いようです。昨夕わずかな痛みと咳がありました。下剤を投与したのでアヘン不使用しないようにしています。」

▼谷村計介の顕彰

左 郷里宮崎県倉岡の「忠烈碑」

大正14年(1925)造立。緑の深い熊本城の石垣材を用いている。

右 谷村計介墓（宇蘇浦官軍墓地）

参拝者がその武功にあやかうと打ち欠くため、鉄枠で覆っている。



この活躍は「軍人の鑑」と評され、日露戦争後には、唱歌「谷村計介」が作られ、小学校の修身教科書に載るなど、戦意高揚のためのプロパガンダとして教育の場に取り入れられていく。

二月二一日、熊本城内の電信が断線。そのため、城内の状況と今後の作戦計画を伝えるための密使が派遣される。

谷村計介は、玉名に駐留する第一旅団への密使として農夫に変装して潜行し、途中二回、薩摩軍に捕らえられたものの切り抜け、無事、連絡を果たす。しかし、直後の三月四日、田原坂の戦いの緒戦に志願して参戦し、苦戦のなか敵塁に突撃。たちまち数弾を受けて斃れた。

軍人の鑑—谷村計介伍長



▶「谷村計介使命を果す之図」 聴 泉熙作

緑側に立つ野津鎮雄第一旅団長・岡本兵四郎参謀長の姿は忠実に、薩摩軍の間諜との疑いから腰縄をかけられた谷村は、掌を前に向け、踵を着けて直立するという軍人の所作に則って描かれている。

左上の枠内の「軍人亀鑑」は、明治16年(1883)、靖国神社に造立された顕彰碑「軍人亀鑑碑」に刻された有栖川宮親王の揮毫、谷干城の撰文と同じものである。



宇土櫓と藤崎八幡宮・大クスノキ群

段山八幡宮と戦火を被る民家

川・防塁を乗り越えた戦闘

薩摩軍の四斤山砲

段山の戦い

三月一二・一三日、籠城戦中、最大の激戦が繰り広げられた。段山の戦いである。戦いの原因・経緯は、以下三点と考えられる。

- ① 段山は城内を近くから砲撃できる好地点、守城側からみれば弱点であり、鎮台（籠城軍）にとって緒戦で奪われたこの地の奪還は必須であった。
- ② 前日の一日、矢文にて届いた勸降状に対し、鎮台は報復的回答を試みた。
- ③ 薩摩軍は、段山への砲撃に敢えて応じず、寡兵を装って鎮台の突撃を誘導した。

かくして、一二日午後五時頃から不眠不休の戦いが開始された。両軍の距離が迫り、狙いをつけて撃つことが出来ずに瓦礫を投げ合ったところもあったという。翌日午後三時頃、各方向（三方）からの攻撃を支えきれなくなった薩摩軍は島崎方面（西側）に退却し、戦いは終了する。

記録には戦場に残った薩摩軍の戦死者七三人を葬ったとあるが、事前に後方に收容された兵を含めるとそれ以上だったと考えられる。鎮台側の戦死者は陸軍兵四〇人、警視隊二一人、負傷者は一六〇人とあり、二日間の戦いがいかに激しかったかを物語っている。

▼段山の古写真



段山から島崎方面（西側）を望む。井戸の周りに土俵・堡壘が並ぶ。



島崎口（南東側）。「段山激戦図」と同アングルで描写の正確さが判る。



北東の漆畑付近から段山（中央の低い丘陵）を望む。



▲「西南戦争 段山激戦図」矢田一嘯作

明治27年(1894)、城下(現在の辛島町交差点付近)に開館した九州パノラマ館に展示された矢田の代表作。

画面左から右へ南流する井芹川、中央には小高い段山の丘(現代に削平)、奥には熊本城宇土櫓(天守は焼失)、右端には薩摩軍の砲台が置かれた花岡山が描かれている。着剣し発砲しつつ突進する籠城兵、小銃や刀を手に応戦する薩摩兵―激戦の様相を克明に再現したものである。



▲與倉知實の軍服

下の肖像は明治8年(1875)頃撮影。着用しているのは恐らくは上と同一服。

二月二日、籠城緒戦の激戦地となった片山邸において被弾、戦死した與倉が着用していた軍衣。黒絨の所謂肋骨服で、袖章は階級(中佐)を表す。折襟・前立・袖口の毛皮(アストラカン)は失われている。左の胸部と袖が切り裂かれており、これは救急にあたり服を脱がせた際の措置とみられる。右胸部の破れは炸裂弾が当たったものか。

與倉知實歩兵第一三連隊長戦死―切り裂かれた軍服



▲「段山田端合戦細見之図」

左上の枠内の記述から戦い直後(田原坂陥落の3月20日以前)に描かれたと推定される。

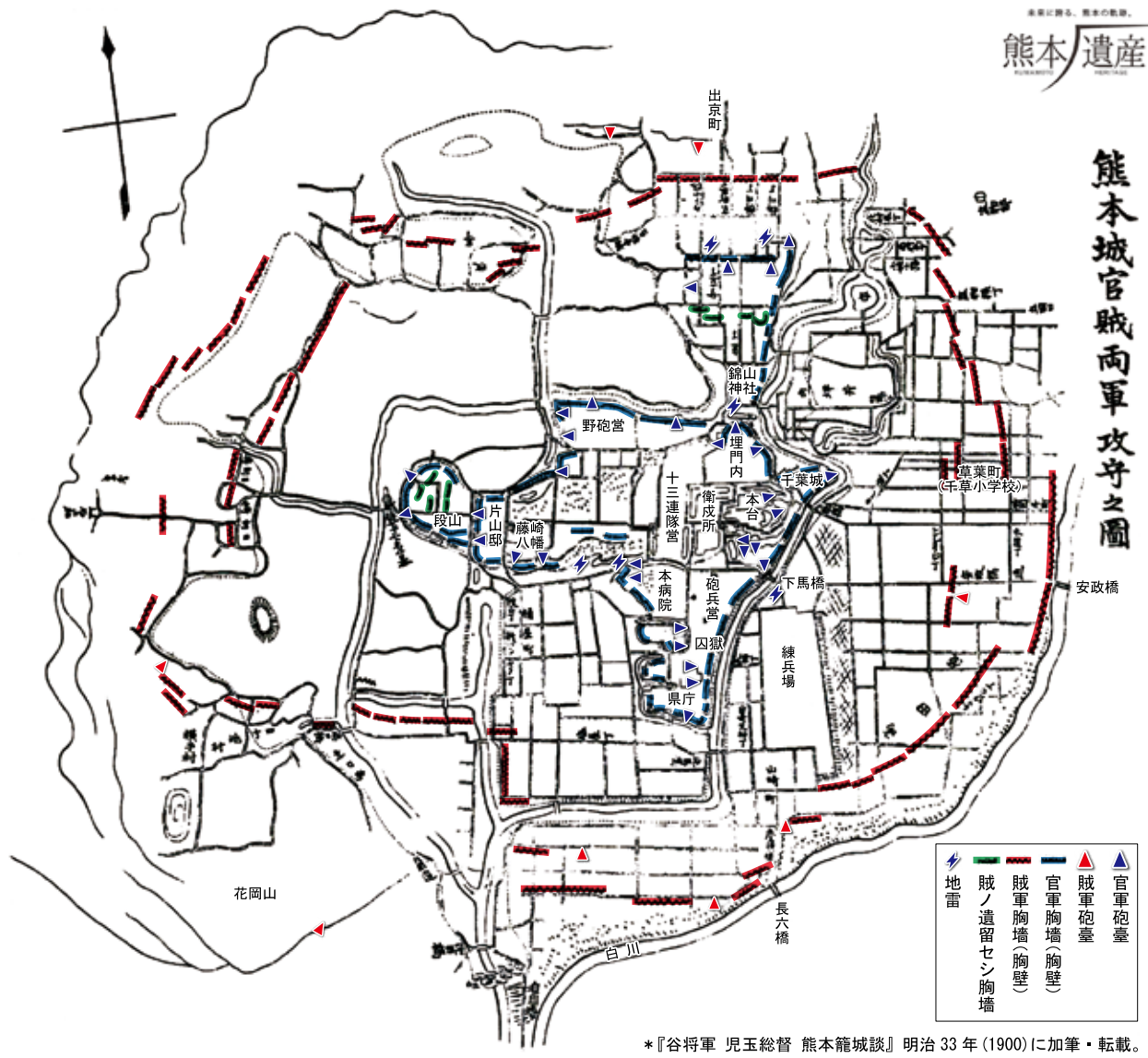
発行は「肥後隈庄町」(現在の熊本市城南町)の「焼出舎」。戦火で焼け出された地元の版元で、戦闘を実際に見た絵師が描いたとみられ、薩摩兵の姿や黒火薬による砲煙の描写が忠実である。



▲段山の「薩摩軍戦死者慰霊碑」(昭和9年造立)

昭和50年(1975)の井芹川改修時、薩摩兵のものとみられる多くの人骨が発見され、これを期に移築・改修された。

熊本城官賊両軍攻守之圖



*『谷将軍 児玉総督 熊本籠城談』明治33年(1900)に加筆・転載。

熊本市田原坂西南戦争資料館



利用案内

- 開館時間 9:00 ~ 17:00 (入館は16:30 まで)
 - 入館料
一般 (高校生以上) 個人 300 円 団体 (20 名以上) 240 円
小・中学生 個人 100 円 団体 (20 名以上) 80 円
 - 休館日 12 月 29 日から翌年 1 月 3 日まで
- ただし乳幼児、障害者手帳をお持ちの方、熊本市・鹿児島市・福岡市・北九州市に居住する 65 歳以上の方 (証明できるものを提示) と同市内の小・中学生 (名札か生徒手帳提示) 等の入場は無料です。

お問い合わせ

熊本市文化財課植木分室
〒861-0195 熊本市北区植木町岩野 238 番地 1
☎ 096-272-0551

熊本市田原坂西南戦争資料館
〒861-0163 熊本市北区植木町豊岡 858 番地 1
☎ 096-272-4982

